

学校経営のポイント

中越沖地震で“危機管理意識”を新たに

若井 彌一

前回の「平成 16 (2004) 年新潟県中越地震」(10 月 23 日) から未だ 3 年も経過しないうちに、震源が比較的近いところで、またも大地震が発生した。「新潟県中越沖地震」である(平成 19 年 7 月 16 日)。

短期間で発生した大地震

気象庁の「日本付近で発生した主な被害地震(平成 8 年～平成 19 年 6 月)」によれば、前回の「中越地震」では、人的被害が死者 67 人、負傷者 4,805 人、物的被害が住宅全壊 3,175 棟、住宅半壊 13,794 棟などであった。

今回の柏崎沖を震源とする「中越沖地震」は、被害程度で見れば 7 月 21 日現在、前回の地震に比べて軽くて済んだとはいえないもので、すでに 11 名の方々が亡くなっており、負傷者数も 1,770 人に達している。また、家屋の損壊が 10,575 棟と報道されている(死亡者数は 7 月 23 日現在)。

大地震がくれば、短期間には大地震が再び襲ってはこない。これは、被災者共通の素朴な祈り・願いである。今回の大地震は、その祈り・願いをも打ち砕いてしまった。前回の地震で被災し、また、今回も被災した人々もいることであろう。この紙面を借りて、被災された人々に、心からお見舞いを申しあげたい。

“災害は忘れたころにやってくる”とは、なかなか含蓄のある箴言であるが、今回は前災を忘れる間もなく襲ってきた。自然は、ときに表現の幅を超えた冷酷な仕打ちをする。

今回のような例は珍しい。けれども、わが国では、関東、東海、南海等のとくに発生の可能性が高いと警戒態勢が強化されている地域だけでなく、今春の能登・輪島地震(3 月 25 日)の例に見られるように、それ以外の特別警戒の対象とされていない地域

であっても、大地震が発生する可能性は否定しがたい。誰もが大地震発生を視野に入れて、危機管理の意識をもって備えをする積極的姿勢が求められている。

ところで、「大地震に備える」と聞けば、われわれは非日常的な特別訓練等を想定しがちである。しかし、危機管理行動の多くを占めるのは、日常生活のなかでの小さな(ちょっとした)備えの積み重ねである。

“日頃の小さな備え”が危機管理の基本

大地震を想定しての避難訓練の最中に大地震が襲うことは、確率的に考えれば、きわめて低いであろう。その点を考慮すれば、学校教育で重点的に取り組むべきことは、日常の教育活動と結びつけた、比較的容易に実施(実践)できる、児童・生徒の安全確保のための迅速な行動の積み重ねである。

地震は、われわれの想定した時と所(地域)で発生するのではなく、むしろ、「気まぐれ」といってよいほどの発生仕方をする。皮肉な言い方になるが、日本全国どこで大規模な地震が発生したとしても、それを事後的にもっともらしく説明(解説)することは困難ではなからう。

各学校においては、地震に対する、可能な範囲の日ごろの備えを徹底するとともに、いたずらに将来を悲観することなく、困難に負けることなく、前向きに生きる姿勢を育てる教育の実践に努めたい。

最後に、被災された地域の人々(児童・生徒を含む)への励ましとお見舞いに、全国の多くの学校で取り組んでくださることをお願いしたい。被災者は、その励ましによって、また、前向きに生きようとする意欲を新たにすることができる。

(わかい・やいち = 上越教育大学大学院教授・附属図書館長)

●好評新刊! ● 7月27日刊! 菱村幸彦【編著】 A5判392頁・定価3,150円 教育開発研究所

『最新教育法規ハンドブック—学校管理職必携』

『関係力～「子どもが生きる学力」への挑戦～』

上越教育大学附属小学校【著】
B5判215頁・定価2520円